
cloverroom case3

fairy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

clover room case 3

【Nコード】

N9514K

【作者名】

fairy

【あらすじ】

1人息子を亡くした夫婦の前に現れた捨て猫は息子と同じ名前だった

(前書き)

clover roomの第3弾

両親が大好きだった子供の小さな願い

case 3 小さな思い

木村亮太、真奈美

(きむらりょうた、まなみ)

共に25歳

友人の結婚式で意気投合し、交際から1ヶ月のスピード婚、今年5年目の夫婦である

それぞれ亮太は不動産で、真奈美は駅前の雑貨屋でショップスタッフとして働いていた

2年前、1人息子の充が亡くな^{みつる}ってから2人は毎日仕事に打ち込んでいた

ある日

いつものように亮太は朝ご飯を食べて準備し、真奈美より先に出勤しようとしていた

真奈美は茶碗洗いなど家事をしてから家をでる

「真奈美!」

久々に亮太に呼ばれた

真奈美は水を止めて、玄関に向かう
すると、家の前に一匹の猫が段ボールの中にいた

「えっ捨て猫？」 「みたいなんだ
どうしよっか？」

「飼えなくはないけど、私達家にほとんどいないし…」
「そうだな…」

「でも今日はとりあえず家に入れよう」

「そうだな、次の休みにでも保健所連れてこう」
「そうね」

亮太は猫を抱き上げた
すると、亮太は猫の首輪に目がいった

「ミツル…？」

「えっ」

「ほら、首輪にカタカナで」

「本当…」

2人に沈黙が走る

「あっ亮太、時間！」

「やべっとりあえず家に…」

「うん、かして」

「じゃあ行ってくる」

「いってらっしゃい」

充が亡くなってから会話は減り、2人で出かける事もなくなった
朝の会話も1年ぶり位かもしれない

真奈美は猫にミルクをあけて、とりあえず段ボールに毛布をひいて
おいた

「ごめんね、私も出なきゃ」

優しくなでる

「にゃあ〜」

「人なつっこいのね」

「じゃあね」

真奈美は仕事中也ミツルという名の猫が気になってしょうがなかった
イタズラ？それとも偶然？

『全然仕事が手につかなかった…』
ぐったりとして家に帰ると明かりが付いていた

真奈美はドアを開けて中に入る

「おかえり」

「…亮太、早いね」

「お客さん送ってそのまま直帰した」

「そう」

亮太が真奈美より先に帰る事も充が亡くなってから初めてかもしれない

「ご飯食べてないでしょ？」

「うん」

亮太は猫とじゃれていた
すると、キッチンに見慣れないものがあつた

「キャットフード…亮太、これ…」

「真奈美、この猫飼わないか？」

「えっ？」

「何かさ、名前といい…運命的なもの感じるんだよ」
「……」

「しかも、こいつ帰ってきた時、段ボールの中でちゃんと大人しく
寝てたんだよ

その寝方が充にそっくりで…覚えてるだろう？」
「当たり前じゃない」

真奈美は亮太が猫を愛しそうに笑う姿に嬉しくなった

「飼おっか」

2人は久々に見つめ合って笑った

真奈美はご飯を作りながら泣きそうになった

「今日はハンバーグにしよっかな」

独り言を言った時

トテトテ

「ミツル？」

「えっ？」

猫のミツルが真奈美の横で壁に手をつき、立ち上がって真奈美を見ていた

「……ハンバーグ好きなの…？」

「にゃあ〜」

真奈美は驚いた

充もハンバーグが好きだったから…

真奈美は我慢していた涙がこぼれ、猫を抱き締めていた

「ひっく…充…みつ…みつるう」

「真奈美」

亮太は真奈美の涙を久々に見た
お互いの張り詰めていたものが無くなったきがした

猫のミツルは寝方や食べ物だけでなく、青色が好きで海の写真や空をずっと見ていたり、船のおもちゃで遊んでいたり、本当に充と同じものが好きだった

そんなミツルのお陰で亮太は早く帰宅し、夜は家で食事をするようになり、夫婦間は元通りになってきた

充は3歳の時、病気で亡くなった

元々生まれた時から体はあまり強くなく、ぜん息をわずらわっていた

そして、3歳の誕生日の次の日、肺炎にかかり、そのまま息を引き取った

真奈美はその日から1ヶ月ほど放心状態で亮太は見ていられず、帰りが遅くなるようになった

亮太はよく2人のキューピットでもある友人に相談していた
真奈美の働く雑貨屋はその友人が紹介してくれた場所だった

真奈美が働くようになってからは普通になってきたが、2人の間には壁があるままだった

猫がやってきて1週間

その日はちょうど充の誕生日であった

真奈美の休憩中

携帯が鳴る

「亮太？」

「真奈美、今日、夜外食しないか？」

「うん」

「じゃあ駅で待ち合わせよ」

「わかった」

気休めかもしれないが2人でディナーをすることにした

付き合い始めた頃よく行ったレストランに2人はいた
楽しそうに話していた

その様子を外から猫のミツルは嬉しそうに見ていた

『良かった』

安心したミツルは、近くの原っぱに向かっていた
幸せそうにしている2人を見て嬉しい
嬉しいはずなのに、少し寂しくなった

真奈美と亮太は食事を終えて、ケーキを買って帰宅した

「ただいまあ」

「ミツル？」

「えっいないの？」

「どっかに隠れてるのかな？ 充もそうだったじゃん」

「ふふ、そうね」

「ケーキがあるって言ったら出てくるんじゃないか」

「えー一応猫よ」

「ミツルうーケーキ買ってきたぞ」

ママと2人で食べちゃうぞ」

真奈美は少し嫌な感じがした

亮太はくまなく探すがミツルは見つからない

その時真奈美は充が死んだ時の記憶が甦ってきた

「あっ嫌…亮太…」

「真奈美大丈夫か？」

「充が…充が…もしかしたら…」

「大丈夫だから落ち着いて…」

「あっ…でも…充が」

「俺外見てくる」

「私も行く…」

「でも…」

「…………大丈夫だから連れて行って」
「…行こう」

2人は探しにでた
心当たりを全て探す
そして

3人でよく遊んでいた原っぱに一匹の猫がいるのを見つけた

ミツルだった

「真奈美、こっち」

「えっいた？」

「ほら」

「良かった…」

2人は安心した

ミツルは月を見上げていた

すると、時計が0時をさした瞬間だった

ミツルは人間の姿になって消えかかっていた

「「充！」」

2人は思わず叫んでいた

充は2人に気付いた

『ママ、パパ

僕を産んで育ててくれてありがとう

いつまでも仲のいい2人が大好きだよ』

「充！」

真奈美が駆け出し触れようとした瞬間
充は消えていった

「充…？」

「真奈美」

「充いたよね、今」

「いたね」

「私達に会いにきてくれたんだね」

「そうだね」

「…どうして気付かなかったのかしら」

「俺もわかんなかった」

「充が会いに…」

真奈美は泣き崩れ、その場に座り込んでしまった
亮太はその横で真奈美を抱き締めていた

2人はしばらくそのままだった

「朝になったら次は俺達が会いに行こう」
「買ったケーキ持ってね」

2年後

真奈美と亮太は充の墓参りにきていた

「充、今日は紹介したい子がいるんだ」

真奈美の腕の中には生後半年の赤ちゃんがいた

「充、妹の実よ」
みのる

e n d

(後書き)

充が亡くなった後の両親からは笑顔が消えていることがすごく悲しかった

2人に元の笑顔を取り戻してほしいという願いが鍵となった
充は捨て猫となって、両親に近付いた

case1同様、1週間だけ

次はlast case 花嫁

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9514k/>

cloverroom case3

2010年10月17日03時58分発行